

ほくげん
北原

カップのふちに残ったコーヒーを
人差指でさっと拭き取り、口に含む
異邦人としてしか生きられぬ私にとっては
御前とても憧れにしか過ぎず

外を見やれば針葉樹から飛び散る葉が
きらめきながら風に乗っている
これが横なぶりの雪に変わるのもあと少し
そして僕がここを下りるのも、もう近い

湯いた肉のわななきの上を這って行った甲虫は眠りに就き
御前が切なく抱いていた、その
僕の腕は既に探り始めていた、テーブルの上で・・・
慮げるための何かを

ひとり歩きしはじめた盲目の嗅覚が
満たされることを嫌悪して速度を増してゆき
御前は息を切らしてそれを追ってきた
それも終わりだ

下りた後の行く先は決まっていた
御前にも分かるだろう、それこそ
満たされることを知らぬ地

ほくげん
北原だった

(1989.12.18)